



外文事家

服部文庫

117

/

/



御代々文事表卷一目録

東照宮御時

文禄二年ヨリ

慶長十九年ニ至ル

御代文事去一

御書物奉行臣近藤守重 撰

謹按



神君御武威ノ赫々タルコトハ人皆知ルトナ

口ナリ徧子ク傳紀ヲ閱スルニ御文學ノ事

イマ夕明顯著録ルモノヲ聞ス蓋シ當時

干戈槍攘ノ際世ニ武彊ノミヲ眉目セシ

ユヘ所謂ル武彊ノ傳紀アリテ文筆ヲ筆

スルモノ鮮ク且ハ廿邊ハ戰場ニ顯レテ

夫ノ面夕リ見ル處文事ハ間内ニ隠レテ
スリ闕ニ難キ故ニ世ニ其御文徳ヲ傳
ルヲ稀ナル歟竊一按ニ天正五年十二月十
日

正親町院ノ制旨ニ

神君ノ御美德ヲ舉テ宜ハク節義能ク文藝ニ
濟ト同八年正月五日ノ制旨ニ宣ハク允
允武志道游藝ト同十四年十一月五日ノ制
旨ニ宣ハク守以文勝以武勇依礼治依仁ト

然レハ

神君御文徳ノ穆々タル其升リ聞フルノ舊シ
キ丁仰瞻スヘク又天海僧正撰スル

東照宮縁起ニ

後陽成院乃宸毫ヲ

按ニ宸筆トハ綸
旨ヲ云ナルハシ

新田大相玉家康公

按ニ御称號ヲ新田ト云
ハルヲ岩松由緒書ニ

歳有院稱御初名新
岩松ト改名仕ムト
二延寶八年七月二
前侍從參上自新田
獻上件使也故嚴右
位為也也十八日新
田大納言公綱吉將軍

下也。地下職掌錄御藏。小舍人ノ條ニ新
殿將軍宣下并太政大臣宣下等告文等奉
之。ト見エタルハ蓋好勇恢武天外ハ
此時ノ事ナニム也。加之研精於文學發志於經論ト云ヘリ
宸筆ニ所謂ル研精ハ豈尋常好書ヲ云ノ謂
ナラニヤ深ク御好學ノ厚ヲ嘉獎シ給フ所
以ナリ是ハ此

聖天子ノ親シク
大神君ノ叩文德ヲ贊賜ニ給フ處ニシテ人臣
滋美ノ院辭ノ如キハハラス板坂ト齊カ

覽書ニ

家康公書籍を好み、
書六韜之畧、貞觀政要和事、延喜式東鑑、
ト云ヒ元佑カ七書ノ跋ニ

大將軍家康公以文安人以武威震天下萬民咸
歸服ト云ヒ承兌ヲ周易ノ跋ニ頃蒙

大將軍源家康公鈞印行周易其志要弘聖首
於萬年ト云ヒ木道春雜錄及ヒ後勝光カ
記ニ散見スル如キニ是皆實實ノ良臣常

左右ニ親炙シテ直筆スルモノ後來臆度

韻語ノ如キニテラハレハ亦以テ其概

闕ニ足ル道春カ行神社考野樵等一散見

スルモノナリ光カ筆記トハ駿府記ニ指

ス其記ハ左史記事右史記言ノ體例ニテ

神君起居注ト云ヘシ神君常ニ東鑑ヲ

好マヤ給フ故ニ光次其體例ニ倂テ此

ヲ作ルモノカ凡史筆ノ曲直ハ在上

ニ係ル千載ノ下ヲシテ制度文為ノ詳

考セシム鑑倉古大將ノ明英ニ非ムハ何

此良史筆ヲ得ムヤ駿府記ノ如キ今古同軌

ト云ツ然ト雖モ世多所謂ル武邊ノ傳紀

ヲ悉獵ルニ習テ人或意ヲ御文事ニ留

凡事鮮微臣乏ヲ堂書受ケ謹テ

神君

台徳公

大猷公ノ御手澤御本ヲ拜覽スル事ヲ得

戈兇ノ際能ク神意ヲ文事ニ盡サレシ

ヲ感戴シ又嘗テ慶長御寫本同御讓本及ヒ

駿府御文庫本慶長御板本ノ數件ヲ著録

テ御文思ノ正ハ廣邇ニシテ萬世ノ懿範

貽シ給フ所以ノ者ヲ景仰ス於是テ自ラ

陋ヲ揣ラス右文故事ヲ編纂シ又道春力
本日記ヲ附注シテ彼ノ御文思ノ廣運
ノ微旨ヲ贊述著セムトス遠ク異朝ニ移
ルニ凡國運ノ隆盛ナルハ創業ノ君能ク文
德ヲ修メ以テ治國平天下ノ要道ヲ講明セ
シニ因ル

神君ノ如キ豐臣氏無學ノ代ニ當テ此ニ大觀
セラレ學ヲ好ミ道ヲ修メ經史ハ言ニ及ハ
ス凡皇國古今公武ノ制度文為ニ於テ深

ク神意ヲ盡サレサルコト口無ク首トシ
テ日本ノ舊記ヲ搜訪シ羅セラレ旁ヲ神道
佛理諸雜藝ニ至ラテ悉ク其樞要ヲ提舉シ
ラル後來文運大ニ開ケ治教休明ナルヲ
源蓋シ此ニ基ス故ニ

台徳公

大猷公並ニ能ク文セテ紹述シ給ヒ懿範ヲ尊
奉セラレシノミナラス尾張義直卿ノ尊
賢ニシテ學ヲ好ミ水戸光國卿ノ源敬公
誅ニ嘗有志學通曉其

書已推已一貫唯口勤而不怠契膏繼晷更
朝儀善讀國史與廢繼絕張皇道弛經營聖
又藏各ノ一 神志ノ継テ聖堂ヲ建テ光
下ニ見ユ 賀大樹源公謁心園孔廟頌ニ東照神
致治重儒淳和笑子嘆院無建將建庫宇宿志
不遂云々ト見ユ春齋ノ集ニ逮東照
神君之治世我先考羅山子實侍讀之撰時
命將同學校有事未果ト見ユ是ニ據レハ
堂ノ設ハ七ト 神志ヨリ出シナリ又羅山
文集ニ寛永六年十二月赴尾川奉謁面相坐
定而後拜孔子堂蔣繪塗小厨子形如堂正
有金像亮舜禹周公孔子安其中云々其堂有
兩扉築石為臺高於地四五尺許堂下有花塙
數畝其傍有文庫各籍及一千部トムヘリ
然レハ公ノ宣聖ヲ尊崇セラレシモ一朝
ルタリ 日本紀分類ヲ作り御年譜ヲ著シ

紀伊頼宣卿ノ創業記ヲ撰シ水戸光圀卿

日本史礼儀類典諸書ニ編纂シ 從二位藤原

山文集ノ序ニ 照宮ノ澤治于民久矣其

支三世而有英雄人出焉云々知言ト云々

道春年譜ニ曾應義直卿之求作神社考詳

宇多天皇紀畧等常談本朝故事應朝宣卿之

求作史隱比事諺解且屢問法律之事應朝房

卿之長抄出神道要語頼房卿嫡子羽林光國

好作詩文屢有贈答是三 會津正之朝臣ノ瀛

洛ノ學ヲ講究セリカ如キ 會府也稿ニ

年々文學成如ニ書翰を讀み儀成好記

有ニ成長以漢平生諸書成爲後傳ニ云々

三ノ山時希子小女ニ書成漢山而學志純了

儒教成被言以爲漢山而學志純了

儒教成被言以爲漢山而學志純了

即文を御密に御事に入事仕候
玉傳所縁二程治教縁三心縁云云
自明縁均ニク

神君ノ御文思ヨリ胎胎シテ

台徳公

大猷公ハ孝無違奉承貫行ノ美意猷液薰陶ス

几處ナリ 按ニ駿府記慶長十六年十一月ノ條

御機嫌好悪給御考行超越眞舜漢云々又

經史ノ講談ヲ聞食シ東鑑點本ヲ命セ

ルノ類ニナ御孝心ヨ 即元和二年駿府御文

庫ノ遠籍ヲ三家へ配分セウレシヲ見テモ

其曲刑ヲ窺ヘシ此ニ由テ是ヲ見レハ

神君以來崇文ノ一事俱ニ宗藩ニ旁通シテ遂

ニ文明ハ共基ヲ鑿成セラル後來闔國學校

ヲ興シ經傳ヲ刊布シテ天下ノ人ヲシテ君

ニ忠ニ親ニ孝アル道ヲ講明セシメ文明熙

皞ノ澤ヲ蒙ル事ヲ得モノハ是皆神範聖模

ノ馴致スル處ナリ豈感發興起セサレハ

ムヤ故ニ今身重自ニ賤陋ヲ忘テ文事表ヲ

標記シ以テ

神皇以來御文德ノ緝熙廣運ナル所以ヲ著

通覽セム一ス其詳ナルヲハ右文改事各効

ト御奉日記附注雪録トニ編纂スル而已

文祿二年

是歲處亡藤原肅ニ命シ御前ニ於テ貞觀政

要ヲ讀セラル惺窩行狀○武德大成記ニハ

アリ○道春カ貞觀政要ヲ讀マシム大

大神君モ常ニ此ヲ讀セテ聞食ト承更照

御前講釋ノ始

見ユ是御前講釋ノ史書ニ見エシ始ナリ

ノ左ニ載ス

永祿五年二月源家相傳ノ軍書四十八冊阿

部善九郎正勝奉行トシテ書寫セシメシハ

秀榮記○阿部家傳

同三年

御詠歌 二月廿九日秀吉公芳野花見ノ時五首ノ和歌

ヲ詠シ給フ同時又御連歌四句アリ是ヨリ

十六年四月聚興行幸ノ時ニモ御歌アリ

御詩作

三月高野山大德院ニ於テ御詩作ヲナサレ

御藏書

同四年

六七言律一首足利一本三安親筆大德院宿雅
作ノ末へ題跋シ三要和器ヲ奉ル又古人ノ詩
並ニ御画ノ御揮筆アリ
俱ニ大德院現存ス

十二月禮記正義ヲ市原秀賢ニ貸シ給却奉秀賢是

御藏書ノ事見エシ始ナリ續錄駿府御文庫

是歲足利學校傳フル所ノ聖像圖狩野祐及ヒ宋氏

五經注疏上教安房守并ニ曩ニ元信此書ヲ取

右京亮所寄也

豐臣關白ニ從ヒシヲ丹心學校へ還シ納メラル

守重按ニ道春カ日光紀行ニ學校ノ事ヲ記シテ
云睦子復談云関白秀次歸自東時前寮主元信取

什物從秀次赴洛東照大神君聞而志之而秀
次皆秀吉公入高野山自於此是位又轉徙神君
使城氏與月齋責收什物以還此所謂此四幅聖
像及五經注疏在其中即今所縱觀之圖像是也
野社清所画也云々是歲月ナシト雖モ秀次高野
山ニ入テ自尽セシハ文祿四年七月ニリ故ニ
此ニ係ク

慶長四年

五月家語ヲ開版セラル三要是御當家官板ノ始ナ

御板ノ始
リ續錄家語ノ
條ニ詳ナリ

八月六日細川幽齋仰ニ依テ關東名所ノ和歌ヲ

長教撰各始

録ニフ奉ル

細川家譜

是御以カ奉教撰述ノ始ナ

同五年

二月貞觀政要ヲ開版セラル

承元カ跋又御年譜
モ見ユ詳ニ續録貞

政要ノ條
ニ出ス

三月島津龍伯カ伏見ノ亭ヘ入ラセラル詩歌ノ會

筵アリ御詩作ヲナサル

慶長年中記

四月三畧ヲ開版セラル

元佑カ跋詳ニ
續録ニ出ス

九月駿府福田寺ヘ入ラセラル御歌ヲ詠シ給ハザル

者アネヤ方ト云傳フ

後藤庄三郎由緒畧
内録并ニ駿河國史

是月關原ヘ向ハセラル、テ參河國ヲ過サセ

給ヒケル鈴木重次其采邑加茂郡則定村ノ所

ヲ獻ス御感アリテ御句アリシヲ本多忠勝御脇

ヲ付ル鈴木家譜

是月關原御陣所ニ於テ御添筆ノ御歌一首

野宮住光院ヘ賜ハル高野山大
德院舊記同時足利學校三

要供奉白練朱丸ノ内ヘ御直筆ニテ學ノ一字ヲ

書キ給ヒシ指物ヲ賜フ學校由
來畧記

十月御前ニ於テ藤原肅ヲシテ漢書及十七史

即ヲ讀セラル

惺窩行
人年抄

按ニ妙壽院傳ニ唐
再詳掲一漢七

東葉ノ十七史亦なむ
あとの所載人等を先出
るは彼ち小細孫希

十一月 御前ニ於テ安國寺没収ノ書籍ヲ先長

賜啓始
三要ニ賜フ慶長年中記是賜書ノ事ノ史書ニ見工

始ナリ

是冬曾我尚祐へ公方家ノ法式ヲ下問アリテ故

實ヲ採録セラル曾我家譜ニ又左記の尚祐慶長

あまははるくさむ 年々そふ方家の法式を問ひて

是歲永井右近大夫直勝ノミテ細川玄旨ニ諸礼規
式等ノ事ヲ下問セラレ玄旨ヨリ獻スル處ノ書

籍ヲ直勝ニ賜フ永井家譜ニ細川家譜ニハ十一

三卷ヲ書上スト見エツレ氏此冬曾我尚祐へ下
問ノ御事モアレハ五年及ニ十一年兩次下問ア
リシモ知ヘカラス故ニ此ニ出ス

同六年

九月伏見ニ學校ヲ設ラル慶長記圓光寺由緒書山

學校ノ始
出スニ是御當家學校ノ始ナリ

同七年

六月江戸富士見ノ寺ニ御文庫ヲ建ラレ金澤文

御文庫ノ始
ノ本其他ノ圖書ヲ收儲セラル慶長是江戸御

物藏ノ史書ニ見エシヨナリ

同八年

三月廿九日 台徳公御好ニテ御硯箱御印籠へ

ヲ蔣繪ニナサレ慶長年録

九月東大寺へ寶物ノ長持三十二箇寄附セラル奉行

本多上野介大久保石見守ナリ東大寺櫃裏書付

是歳世上ノ講書ヲ許サレ道春年譜

同九年

正月十日足利學校寒松貞觀政要點本ニ於慶長年録

按二四年間板ノ御本ハ點セシナルハシ

三月 台徳公へ黒田筑前守長政父如水孝人遺物

東鑑ヲ獻ス家譜

六月十一日吉田神龍院梵舜謠抄ヲ獻ス舜舊二御本日

記附注ニ出ス

同十年

三月東鑑ヲ開版セラル承兌カ跋創業記駿河記ニ續録東鑑ノ下ニ出ス

四月周易ヲ開版セラル承兌カ跋詳ニ續録馬ノ下ニ出ス

是歳二條御城ニ於テ儒者林又三郎信勝ヲ召出

同十二年命有テ祝
三條下問ノ德音アリ
ル 髪道春ト名ツク
根ニ云さるる事 本相といふ 内太後 余ハ弱冠の時 本相といふ 内太後 長光信長を信長極端あとも 神候と云ふれ 武ハ多福より 歳代を 武ハ多福より あり 光武を多福九世乃孫 又又魂者 李夫人の由府と 東坡詩注とに 人の魂を来と 榮也との 慶長乙巳年 道春年譜又是ニ同

同十一年

七月七書ヲ閉版セラル 室ノ跋詳ニ 續録ニ出ス

同十二年

二月十五日細川幽齋 教ニ應シテ室町家式三

ヲ書シテ奉ル 細川家譜ニ慶長十一年十二月永井 右近少吏直勝戦以て室町家柳家の 礼儀故実戦を 式三巻を書き 慶長六年直勝を 事成るを 二五年ト十二年ト兩度下問アリニニヤ

四月 台徳公江戸ニ於テ道春ヲシテ三畧漢書

讀マシメラル

是歲侍醫壽命院宗已王治綱目ヲ獻ス寛永系圖傳

道春長崎ヨリ歸テ本草綱目ヲ獻ス林氏家譜

同十三年

正月 台徳公學校寒松ニ命シ活版東鑑ヘ朱墨ノ

點ヲ加工シメラル寒松東鑑跋語

是歲駿河ニ於テ道春ヲシテ常ニ論語三畧等ヲ讀

シメラル以御文庫ノ管鑰ヲ掌ラシム道春非譜

同十四年

八月東寺觀智院ニシテ經藏ノ諸書副本ヲ作り

高野青巖寺ニ納メシメラル御制法

是歲ヨリ前東鑑ヲ細川幽齋ニ賜フ細川家譜

同十五年

九月群書治要一部鎌倉ノ僧徒ニ命シ總持院ニ於

テ謄寫セシメラル本光日記後ニ光記ト引モノ即是ナリ

此歲侍醫吉田意安父宗恂カ遺物杜氏通典奇効ヲ

方ヲ獻ス 台徳公殿ハ千金方ヲ獻ス吉田家譜

同十六年

九月十六日吉田神龍院梵舜藤原系圖ヲ獻ス記

以下二十年八月十七日ノ條ニ至マテ出

十九日道春ヲシテ建武式目ヲ讀シメ其得失ヲ

論シ給フ守重按ニ此歲四月十六日京師ニ於テ

盟眉ヲ捧ケシム其第一條ニ如右大將家以後代

代公方之法式可奉仰之ト載セラル是貞永式目

ノ文ニ據ラレシナリ爾來建武式目及ヒ延喜式

並ニ群昏治要貞觀政要續日本紀ノ類常ニ御講

究アリ是二十年御法令ヲ頒布セラルカ爲ノ

張本ナレハシ神君ノ能ク古訓ヲ替ヘ給ヒシ

御事ニ

廿日南蠻世界圖屏風 御覽アリテ異域國々ノ

御沙汰ニ及マ守重按ニ是蠻國圖ノ日記ニ見エ

慶長六年ニ安南東浦呂宋同七年ニ太泥同十

一年ニ暹羅戰城田彈同十四年ニ阿蘭陀同十七

年ニ亞馬港新伊西把彌亞同十八年ニ漢又利亞

等ノ國々昏ヲ奉リ物ヲ捧ケ其人ヲ引見セラレ

シ事モ亦多カリキ

廿二日宗哲法印ト同ク本草藥種ノ御雜談アリ

按ニ吉田家譜ニ意安法印其項異國ヨリ入貢無

名ノ玉石御見セナサレ名ヲ御尋ニヨリ柏枝瑪

腦花ナルヘシト申上ケレハ本草綱目御

取寄 御覽アリテ感賞セラルト云々

十月朔日前殿造替漸出來中舟橋秀賢諸家略系

屏風一雙ヲ獻ス

二日天台西樂院遺物トシテ三大部六十卷

坊是ヲ獻ス

六日畫工狩野ヲ召テ大内圖并日本大社圖ヲ
造ノ前殿ニ畫ヘキノ旨仰出サル即チ畫工舟橋
ト相談スヘシトナリ

十一月十八日鎌倉莊嚴院御尋ニ依テ鎌倉三代將
軍北條九代ノ舊規ノ事ヲ言上ス保曆間記所持
ノ由即其書 御覽アルヘキノ旨 仰セラル
十九日夜ニ及テ鎌倉莊嚴院保曆間記持參 御

前ニ於テ是ヲ讀ム

是歲神孫 大猷公甫元ハ歲松ノ畫ニ和歌ヲ揮筆

セラル 日光龍光院ニ現存ス又詩ノ
御添筆アリ何ノ時ヲシラス

同十七年

二月御前ニ於テ東鑑盛衰記異同ヲ考ヘシメ給フ

廿四日御連歌アリ 山名家所
傳懷紙

三月十日伊豆山般若院續日本紀ヲ獻ス道春ヲ

テ是ヲ讀シメラル

十一日道春ト道ヲ論シ給ヒ中ト權ト湯武故

ノ御論アリ按ニ此對問羅ニ文集ニ載ス又也
下至大者道至強者理ト云フヲ學校申サレシ
何ノ唇ニ出タルト仰ラレシ片畫一元氣ニ見
ラレル由申サレシニ其ニ言天下ノ名言ナリト
ニアルシト云々晝一元龜宋版闕本今昌平學問所

四月廿六日相國寺良西堂春秋左氏傳三十卷齊民
要術十卷ヲ獻ス

六月廿五日道春へ曾子子貢一貫ノ事ヲ下問セラ
ル又湯武ノ論アリ按ニ此對問七羅山文集ニ載ス
廿月十八日閑室遺物トシテ黃氏日抄三十一卷ヲ

獻ス按ニ此事圓光寺由緒唇ニモ出

晦日暹羅商客船頭隊子緋羅紗鮫皮等ヲ獻ス因
テ諸國蠻夷ノ物語ヲ問シノ玉フ

八月三日科注法華ヲ僧廓山ニ賜フ

十五日大明人一官御藥種等ヲ進上ス又大明人
祖官御前ニ出ツ仍テ兩人ヲ召テ唐土ノ御雜談
アリ

是歲道春ニ命ンテ東鑑綱要ヲ撰上セシメラル
文集又道春年譜ニ六神君常好讀東鑑以其勞校索使道春抄唇之

同十八年

台德公入神龍院梵舜紹運系圖ヲ献ス

舜舊記

六月三日御前ニ於テ道春論語ヲ講ス

六日 梵舜出任神道傳受秘密ノ事輒ク聞ヘキニ

按二道春力本朝祀社老二念作
發育時幕下一日與顯密之法

師對詰及愛客山權現事幕下告曰此神者聖德

在側尊耳云々又野槌二吉田神龍院駿府一以力

日本文學の所をうめを
 作

宣子則後をけり後より
大相國被蒙の書を何々

て急よ故さうやと余は作のしきうに二神代石

を去假名をけし慶ゆゑ人皇紀にハカを點す

示石川文山書二首
東照大神君之治世也
諸余

有旨有德有方有異有技有巫有盜有左有道有之言有王者有禁有之有余有對有曰有是有

伊勢神飛之妖登時奔亡想是足下亦所可知也耶

類
ス
ル
ヲ
以

テ此ニ附ス

六月十六日公家衆ノ法度ヲ定メラル其第一條ニ

公家衆家々學問昼夜無油斷可被仰自事卜載

九
二 一
出 書

七月七日日本ノ記録畧寫アルヘキトノ御沙汰

九月五日江州管山寺一切經，事披露目錄御臨

阿リ 光記ニ江州ハカニ郡管山チニ密藏院東
 箱數ニ百八十三目祿持帛經數五子四百二十六卷
 子四百七指一卷度坂九子傍披露る九月六日
 目祿經二卷至目トアリ淨宗護國篇成語
 考ニ置一切經三藏夾注ニ第一藏經本舊在江
 州北郡管山寺卷數九五千七百十四卷缺本若干
 卷慶長十八年某月命有司安藤帶刀上田上野介
 彦坂九兵衛請得經本以納増上寺乃報管山寺以
 米地某地而充俸給且近隣山林供寺免租徭云右
 經本今安置輪藏者是也茅二藏經本舊在豆刈修
 禪寺慶長十五年某月遣使請得以納増上寺第三
 藏經本舊在和州成寺慶長十四年三月十四日
 啓南都一乗院御門主請得以納増上寺第一茅二

二月五日五山僧學問作意御前二於テ即席二聞

光記

三月七日五山の僧徒下向の由上聞ニ達スル
處明後九日出仕アルヘク文章ヲ畧キ持参ス
キ旨仰出サレ題ハ為政以德譬_{如下}北辰居其所

星共之ト云ナリ

九日五山僧徒文章ヲ捧ク 御目見仰付ラレ

即題ニ寶樹多花果衆生所遊樂ト云頌ヲ作ラシ

ム 按ニ玉音抄ニ論語ニ為政以德譬如北辰居其

ハ何レモ只今天下靜謐ナルヲ文ニ御旨セ被成候ハ

年ナト、ノ言書申候ヲ 權現様御覽被成是ハ

面白カラ又文法也北辰ノ不動シテ衆星如共之

ニ德ヲ以天下ヲ治ル其德トハ何様ナルト言

タキ丁カナト 御意被成候又按ニ此御試ミヨ

リシテ五山僧徒學問ノ甲乙ヲ品第セラレ碩學

料ヲ始メ給ヒシヲ 按ニ伶官ノ及第料ヲ定メ

古文故事ニ出ス 給ヒシモ此等ノ時ヨリ出

廿六日管絃ヲ聞給フ 給ヒシモ此等ノ時ヨリ出

タカカ詳ニ右 廿七日冷泉中納言為滿參府ス古今傳授アルハ

文故事ニ載ス 廿七日冷泉中納言為滿參府ス古今傳授アルハ

キ為ナリ 今夜道春 御前ニ侍ス 大御所古今

ノ秘事ハ呼子鳥稻負鳥都鳥是ナリ詳ニ三箇秘

密ノ事ヲ告ス其後為滿ノ言トコロ皆同シ道春

ノ博學ヲ感ストアリ又按ニ野槌ニ與子多稻負

鳥面子多是古今集のニ有テハ子多ハ人をも

云猿をも云ト何れハ猿トソハ子多ハ人をも

云リ近代の歌人此事を秘して以外ハ其内

と云ハ余竊ハナレハ子多ハ人をも云ハ大相

この後然るの振魂の事多ク作玉ハハハ

ちかりて同ノ政通家子多ハ振魂の法ハハ

知傳ラレ魂を喚トリハハハハハハハハハハ

一書に就即 大相公
榮——もろ

四月五日群書治要貞觀政要續日本紀延喜式 御
前ヨリ出サレ五山僧ニ公家武家ノ法度タルヘ
キ所ヲ書技シメラル崇傳道春承之守重按ニ武
德大成記ニ
羣昏治要貞觀政要續日本紀延喜式御考ヘ治道
ニ便ナル簡要ナル語ヲ抄畚スヘキ由仰付ラル
ルトアリ是杜撰ノ臆説ナリ儒生ノ知ル処ニア
ラス本文ヲ見テ 神慮ノ在ル処ヲ闡ヘキ也
淨土宗西福寺長老撰撰集二卷ヲ献ス即 御前
ニ於テ讀シメラル按ニ田光大師直蹟ノ撰撰集
ノ版本今ニ現存スルモノア
ルナ 總持院法華經廿八品ノ歌廿八首是ヲ献ズ

御前ニ於テ冷泉金地院ニ讀シメラル
七日今夜道春ヲ 御前ニ召テ論語為政篇ヲ講
セシメ給フ

十三日羣書治要續日本紀延喜式等ノ拔書

御前ニ上ル金地院道春 御前ニ於テ是ヲ讀ム

廿日 大御所仰ニ曰公家中ノ法式糾シ定メラ

レムカ為ニ公家衆ノ記錄皆書寫アルヘキノ旨

三代實錄西三條所持ノ由言上ス按ニ光記六月
廿四日ノ畚

ニ三條殿ニ三代實錄廣揚殿ノ文德實錄ニ
名實於 御前ニ畚人其ノ事作上ルト見ユ守重

翌年五月大一統ノ後七月七日伏見ニ於テ武
諸法度十三箇條同十七日二條ニ於テ公家諸
度十七箇條仰出サル其源蓋シ此ニ基スル山
謹テ記録ノ文ヲ詳ニスルニ神君モト厚ク夢
問ヲ好マセテ將ニ大一統ノ洪業ヲ開カシム
トスルニ當テ首トシテ公家中ノ法式ヲ紀定セ
ラシテ、ニ意アリ然ルニ公家衆ハ多クハ家傳ヲ
秘シテ輒ク其旨ヲ出スコラサハ多クハ舊記ヲ
援引シテ常ニ異論アリト聞ユ神君此ニ大觀
セラル、丁有テ慨然トシテ遂ニ日本ノ記録諸
家ノ傳記マテ悉ク蒐羅傳馬セシメラレ遂ニ萬
世ノ龜鏡トナル其深謀遠圖貴ムヘシ見モノ熟
讀玩索スヘシ

廿八日安藤對馬守 御前ニ出云々本草綱目江
戸ヘ遣ハシメ給フ江戸ニ是ナキ故也、是日丹

橋式部少輔去ル廿日ノ返書到來日本物本ノ記
錄仙洞并九條殿官務ニ是有ヨシ目錄來ル光記

五月二日 仙洞ヨリ延喜式ヲ出サル光記

七日舟橋ヨリ記録ノ覺書 御前へ上ル御上洛

ノ時悉ク御書寫アルヘキトノ御事ノ由同上

十六日江戸ヨリ五山ノ僧徒文頌到來按ニ此前三

三日江戸幕府御目見トシテ文題ハ君子德風
五山衆御暇ナサルト云フアリ也小人德草也草加之風則必偃頌ハ是德住法位

世間相常住法華方便品 御前ニ於テ金地院道春

レヲ讀ム褒美セシメ給フ

六月二日卷本之續日本紀不足ノ處十卷此中五山

僧ニ仰付ラレ書續セ給フ 御前ニ捧ク辰紀行

ニ金澤本ヲ舉テ余の見傳續日本紀ナリ
コト明ナリ

七月朔日今夜冷泉為滿古今集ヲ講ス講釋了テ

大御所曰人丸ノ傳記悉ク何書ニ在ヤ為滿答テ

曰人麿ノ事ハ神秘ニシテ悉ク存セス云々既ニ

シテ 大御所道春ニ問テ曰倭書ノ中人麿ノ傳

記ヲ見ヤ道春答曰萬葉集ニ四人ノ人麿アリ就中

歌ノ上手ハ柿本ナリ何ノ神秘ト云丁アラム為

滿閉口ス松永貞徳カ歌林雜
話ニ又此事ヲ載ス

九日飛鳥井中納言家ノ系圖歌道宗匠日記 御

覽ニ備フ

十日冷泉中納言江戸ヨリ歸府 御前ニ出ツ定

家卿ノ歌書見セラレ歌道ノ御雜談アリ

十四日五智院山門ノ代僧トシテ江戸ニ赴ク一

切經仙波ニ遣ハサル右一切經ハ毛利中納言

道幻庵宗瑞ノ献本ナリ
按ニ今仙波喜多院ニ版一切經現存スト聞

是今日定家自筆ノ伊勢物語 幕下ヨリ進セ

ラル土井大煩頭持叅ス彼本ノ奥書等道春 御

前ニ於テ是ヲ讀ム按ニ右本ハモト後土御門院ノ御物ナルヲ畠山能登入

道并領シ其後轉傳シテ三好修理大夫長慶コレ

ヲ所持ス三好没落以後泉州堺ニアリ細川幽齋

玄旨コレヲ求メ其後尾刈下野守殿訖幽齋ヨリ

所望セラレ下野守殿卒去後 幕下ニ進セラル

十五日公家衆諸士出仕アリ彼定家自筆ノ伊勢

物語日野唯心等ニ見セシメ給フ

十六日冷泉為満定家自筆ノ廿六人歌仙一冊持

叅 御覽ニ備フ按ニ定家自筆ノ歌畧冷泉家ノ重寶多トイヘテ殊勝ノ筆也

ト云フ一人ノ歌十首ツハ是ヲ畧ス其内定家用

ヒ給フ歌一人十首ノ内ニ首ツハ切落砂子ノ然

ヲ以テ紙ニ付テ是ヲ押ス云ミ遺畧ノ内尤奇異

ヲ以テ是ヲ綴テ 鐵杖閑ニシテ唐組ノ打交ノ系

タル四半本ナリ

十八日東鑑大佛供養ノ儀頼朝ノ例讀マシメ給

フ按ニ光記十九年七月十八日片桐市正へノ畧帖ニ今度大佛供養ノ儀布施物并ニ沙汰入用

覺書ニ畧ノ別々ト上別與々双夜 所前ハ具

成 所後ハ云々一系良辰大佛供養ノ時頼朝ハ奉

加ニ記錄ヲ澄子記中ハ度 所前ハ云々以テ兄

馬子走米萬石莫金子兩箇ハ是此分所施入

今度ノ諸人ノ裝束諸君ハ以テ通過一ノ日記

河津機路張りるう心易い云々

同日冷泉為満寫家卿自筆假名遣左枚右枚ノ書
キ様ノ書物持参 御覽ニ備フ

廿日飛鳥井中納言新歌撰ノ馬ヲ献セラル

廿一日飛鳥井御教奇屋次ノ間ニテ源氏物語ノ

講釋アリ

廿七日成瀬豊後守江戸へ歸ル 大御所ヨリ

幕下へ書籍三十部是ヲ進セラル 江戸御文庫

ニ是ナキ書籍也道春奉之 此賜各三十部ノ内ニ
二部今御文庫ニ現存

ス詳ニ御馬本
譜ノ末ニ出ス

廿八日菊亭殿ヨリ板倉伊賀守一遣ス狀到來ニ

是ハ律令金澤文庫本往昔關白秀次ヨリ菊亭家

ニ遣ハサル今又駿河ニ進セラルト云 按ニ
光記

ニ菊亭殿ノ律令可成所ニ以て
光記
此律令今御文
庫庫現存ス詳ニ御本日
記附注ニ載ス

廿九日日野唯心侍中羣要抄十卷ヲ献ス金澤文

庫本也先年豊臣關白 秀次コレヲ取テ日野家ニ贈

ラレシ本ナリ

八月六日傳長老藏一覽ヲ献ス仰ニ曰此各重

ナリ百部カ二百部開版スヘシ幸ニ銅字廿萬字

コレアル由仰出サレ云々按ニ是銅版活字ノ權

一覽ノ下ニ載ス明年三月廿一日

ト六月晦日ノ條併セ見ヘシ

七日山崎宗鑑筆廿一代集日野唯心等ハ見セシ

メ給フ

九日尊應榮雅西人奧書ノ定家筆古今集逍遙院

稱名院筆三代集等冷泉為滿并公家衆ニ見セシ

メ給フ為滿申云古今集ハ頗不審也ト云

十日公家衆金地院ニ弘法大師各心經道風佐理

行成ノ真蹟尊圓親王道遙院稱名院筆伊勢物語

二部同源氏物語系圖二卷并定家筆新勅撰等三

セラル諸人目ヲ驚ス

十二日山名禪高御前ニ於テ西吟ノ連歌ヲ興

行ス

十九日律令到來ス是ハ金澤文庫本ナリ豊臣關

白コレヲ取テ今出川家ニ贈レリ今是ヲ進セラ

ル令其篇内十一篇不足律二卷在云々○守ニ

云前ノ七月廿八日ノ條併セ考ヘシ又本光

舟橋秀相
三代實錄

記八月十九日板倉伊賀守へノ唇帖ニ八月十日
日ノ沙汰同十九日多津見ル後高宮右衛門
敷十九卷箱ニ入封シ候今十九日所為ハ
露ルル一紙ト所機略ニ由テトアリ此本ハ
御本日記附
注ニ詳ナリ
廿二日飛鳥井雅庸源氏物語三箇大事相傳ヲ受
シメ給フ

九月七日今日舟橋大炊助清原秀相父秀賢死去ニ
依テ継目ノ御礼トシテ叅上父カ遺物トシテ三代
實錄五十卷是ヲ献ス内十卷不足云云

十月二日金地院ヨリ十七史全六十冊御文庫へ納

ム又延喜式羣書治要 御城へ送ス道春請取
出サレシ御本ヲ此ニ至テ返上アリシナリ
廿四日日本ノ記録寫サレハキ旨仰出サレ一箇
寺ヨリ能各十人ツ、南禪寺へ差越ハキ旨金地
院板倉伊賀守連署五山へ申遣ス光記
廿七日山僧徒五十人南禪寺金地院ニ於テ諸
家ノ記録一本三部ツ、書寫セシメ給フ一部ハ
禁中一部ハ江戸一部ハ駿河ニ置シメ給フハキ
由傳長老道春奉之
按ニ武德大成記ニ神君
禁裏へ奏聞シ給ヒ秘府ノ

注并諸家ノ舊記羣昏ヲ寫サセ玉ハムト請ハ
ラシ公卿或ハ書ヲ秘スル人アレハ今其昏ヲ
サスシテ他日其昏ヲ舊證トセラレハトモ信ス
ル有マシト仰有ニ依テ秘本ヲ皆々出サレケ
ル傳長老林道春ニ仰付ラレ五山僧徒ニ寫サシ
ム云々守重云大成記ニ載スル処ハ何ノ書ニヨ
リシヤ姑ク
此ニ附ス

廿八日五山へ今度御答物ニ付長老モ大老ノ外

ハ人數ニ加ヘキ由申渡ス上同

廿九日板倉伊賀守取次ニテ妙覺寺ヨリ曆林問

答抄西宮抄諸家系圖簾中抄要法寺ヨリ扶桑集

本國寺ヨリ太子傳差出ス上同

十一月朔日南禪寺金地院御書物間法度三箇條

ヲ定ム金地院板倉伊賀守連署ス上同

二日二條殿ヨリ江次第并家記ヲ借ラ上同

四日片桐市正大坂邊ノ繪圖ヲ献ス御大工中井

大和守へ仰付ラレ大坂近邊ノ繪圖ヲ作ラシム

按ニ中井実譜ニ大和守正清慶長十八年大坂御
城中へ御隠密ニテ遣ハサレ繪圖等相認申候ト
三ユ前年ヨリ此一
舉アリシナルヘシ

六日吉田神龍院諸家系圖七冊ヲ献上按ニ印本

圖ノ末ニ梵舜ノ奥唇アリ然ル
此本ハト部家ノ傳來ト見ユ

九日南光坊傳長老與御座之間へ召テ御雜談
リ今度諸家ノ記錄御寫ニ就テ日本後紀弘仁貞
觀拾成類聚國史類聚三代拾等 仙洞ニ有之ヤ
否南光坊ヲ以テ仰遣ハサレ記錄等書立即傳長
老道春奉之南光坊院參奏セラル、處ニ御所持
ノ本御書寫アルヘキ旨云云 按ニ光記ニ八日道
春相後アリ 所ハ年十九郭備ニ書カレ南光坊云云也トアリ是
駿府記ト同事ナレトモ八日ニ係タリ何レカ誤
ム
十日 仙洞ヨリ類聚三代拾六卷聖武ヨリ一條

院マテ年代畧十九卷 寺重云此年代畧トハ御本
日記ニ見ニシ日本紀類ノ
注ニ出ス 類聚國史二卷古語拾遺名法要集神
皇系圖南光坊 院使トシテ持奈ス夜ニ及テ道
春 御前ニ於テ是ヲヨム云云
十七日南光坊取次ニテ 仙洞ヨリ令集解來ル
光記

十二月十四日御尋ニ依テ南部信濃寺薰陸ヲ献上
ス是本草綱目ニ薰陸ノ説アルヲ以テリ 同上
十五日今日ヨリ南禪寺五山僧書寫モノ節迫

付テ休ム同上

廿三日傳長老日野唯心 御前ニ出ツ 仰ニ曰今
度諸家ノ記録各寓アリ然レハ公家ヨリ古今礼
義式法ノ相違申サルヘキ旨先日相觸ルノ処ニ
其注進是ナキ由被仰云々

廿六日金地院御前ニ出ツ今度仰付ラレ、記録
等ノ内舊事紀古事記續文粹管家文集西宮記釋
日本紀内裏式山槐記類聚三代格等献之道春同
久伺候ヌ按ニ御本日記ニ舊事紀古事記釋日本
紀ハ神龍院ヨリ出明日記ハ冷泉ヨリ

三代實錄ハ三條大納言ヨリ文德実錄ハ廣橋大
納言ヨリ西宮記ハ壬生官務ヨリ山槐記ハ九條
殿ヨリ管家文藻ハ五條ヨリ江次第ハ二
條殿ヨリ内裏式ハ官務ヨリ出ト見ユ

廿九日智恩院八官大覺寺御門跡へ一乘院廣橋大
納言三條大納言 御對面目錄七箇條ヲ捧ラレ

正月節會事白馬節會蹈歌事准后親王位階事官
位事以下云云仰ニ曰是其古今異同ナキノ分律
令格式ヲ考ヘラレ駿府ヨリ仰越サルヘキノ旨
仰出サレ前ノ四月廿日ノ條併セ見ヘシ日本ノ
舊記ヲ蒐羅セシメラレシハ此等ノ
ノ為メナ
ルヘシ

御代々文事表卷一終

是歲林道春學校ヲ洛陽ニ建ムヲ請フ是ヲ許
ル道春年譜ニ十九年先是先生請建庠序於洛教
冬遠有大坂之役又罹富行狀ニ道春與後藤郎共
自欲居庠序別置誰歟對曰妙壽院欽ト見ユ再按
=是ヨリ後十七年ヲ經テ寛永七年ニ至リ初テ
庠序ヲ開カムトスルノ一舉アリ夫ヨリ二年ヲ
歴テ聖堂ヲ上野ニ建テ翌年七月十七日台駕
聖堂ニ詣リ道春ヲシテ堯典ヲ講セシメラルニ
至ル當時神君ノ能文ニシテ學ヲ好マセラレ
道春ノ聴敏強有カヲ以テ事ヲ成ス
人難キト此ノ如シ嘆スヘキカナ

御代々文事表卷二目錄

東照宮

台徳公 御時

大猷公

慶長二十年ヨリ

慶安三年ニ至マテ

御代文事表卷二

御書物奉行臣近藤守重 撰

慶長二十年

正月八日寫殘リノ御本明後十日ヨリ書立ヘキ旨

仰出サレ光記

十日南禪寺ニ於テ記録各寫初ル上同

十八日仙洞ノ御本五十八卷并借書寫ヲ命セ

ラル光記ニ出ツ詳ニ附録ニ載ス

二月朔日日本ノ記録書寫卒業按ニ本光日記ニ日朔日板倉伊賀守

地院連署五山長老へノ書簡詳ニ御馬本譜ニ
ス此丁又道春年譜御當家紀年録ニモ出タリ

八日 仙洞御本返上光記

十四日金地院書馬取扱ニ付於駿府兵糧下サレ
ヘキ旨 御誕ノ由同上

三月十九日金地院道春京都ヨリ普府ス五山僧へ
仰付ラレ、書籍點ヨリ下着ノ由是ヲ申ス 南
殿ニ出御御難談教刻云々

廿一日諸家勅答ノ書物披露アリ重テ御上洛ノ時
諸家へ御直談ノ上御法度仰セ定ラレヘキ由ナ

り光記 大藏一覽版行ノ事仰出サレ道春コレヲ

奉ル 二條殿へ小草紙ヲ借ラレ

廿二日大藏一覽板行仰出サレ、二依テ清見寺

臨濟寺へ物書六七人出スヘキ旨 御誕ナリ光記

晦日東福寺不二庵へ大藏一覽五ノ卷一冊ヲ借

リニ遣ス同上

是春道春ヲシテ羣書治要闕卷ヲ補ハシム道春年譜

四月二日身延山久遠寺ヨリ本朝文粹二ヨリ十四迄十三

冊來ル 記録御馬本ノ長持三枝京都ヨリ到來御前ニ

五月二日淺野但馬守去廿九日合戰ノ繪圖同記

ヲ献ス

五日 大御所二條御所御動坐八日大坂落城
同日茶磨山出御京都御歸陣二條御所着御

六月四日身延山へ本朝文粹ヲ返ス

光記

晦日 大御所前殿ニ出御シ玉フ道春新板大藏

一覽十部駿府ヨリ持参 御覽ノ処文字鮮明

仰ニ曰一部コトニ朱印ヲ押テ諸寺ニ寄進スハ

シト 寺重云此御朱印ノ摹本續錄大藏一覽ノ處ニ載ス併セ見ハシ

是日二條御殿御教奇屋ニテ金地院雲齋ヲシテ

御藏書ヲ點檢整頓セシメラル其書目百三十部

餘光記

閏六月八日僧廓山ニ大藏一覽ヲ賜フ

九日金地院本朝文粹西部ヲ持参シテ 御覽ニ

備フ件ノ本ノ甲刈身延山久遠寺ヨリ到來ス仍

テ先日五山衆ニ仰付ラレ書寫セシメ給フ処也

第一之卷不足ノ處道春京都ニ於テ探出シ 御

覽ニ備フ仍テ急ニ寫補スヘキ由仰出サレ此

卷出來奇特ノ由道春蒙

御感云々

按二御本
記二本朝文

辨身延十三冊一箱自二至十四第一卷不足一冊見
工記記閏六月九日ノ條二本朝文粹金部十四冊
素紙箱綴以ノ本朝文粹二條御教は持来淺井七平
を於此西上ル本朝文粹と今寫と二條回條は中
一巻之身延も本朝文粹と今寫と二條回條は中
之御教は道春も本朝文粹と今寫と二條回條は中
之御教は道春も本朝文粹と今寫と二條回條は中
謂ル兩部者原春ト新寫ト聞ユレトモ前ノ六月
四日原春ヲ返サレシトモ見ヘタリ猶尋又ハシ
十五日南都法隆寺阿弥陀院遺物トシテ唯識論
并注疏等中井大和守金地院ヲ以テ御覽ニ備
フ先度阿弥陀院死去ノ時申云此春ハ先師興福

寺多門院相傳スル処ナリト

守重云因ニ云御庫
ニ享保採木多門院

日記畧冊アリ文明十五年ニ起
り慶長四年ニ終ル尤實錄ナリ

十七日冷泉中納言大比叡歌合一冊ヲ献ス

廿二日本朝文粹一部兩傳奏ヲ以テ禁裏ニ進

セラル

廿三日陸奥守政宗定家并俊成ノ女自筆ノ古今

集二部ヲ持奏シテ御覽ニ備フ御意ニ入ニ於

テハ進上致シ度由再往言上スト雖モ政宗カ翫

弄ノ慰タルヘキト仰セラレ返シ却ケラル

廿四日 將軍家金地院ヲ召テ武家ノ御法度

條仰出サルヘキノ御内證仰セ談セラル

廿五日東寺寶護院果寶無尽藏並ニ大師筆跡ヲ
持參ス同ク 御覽ヲ經タリ金地院是ヲ奏ス

廿七日 將軍家二條ニ渡御伶人奏樂五番公家
衆諸大名出仕

七月二日傳長老法度ノ草案 御前ニ捧ク伏見ハ

參リ 將軍ヘ言上スヘキノ旨仰出サル 按ニ武家諸法

度被仰出ハ
七月七日ナリ

五日 大御所南殿ニ出御アリ源氏物語抄公家

衆配分ナサレ假名ヲ付ヘキ由仰セラル日野三

條飛鳥井冷泉父子烏丸ナリ

七日武家諸法度十三箇條ヲ頒布セラル其第一

條ニ文武弓馬之道專可相嗜事ト載セラル

八日今日冷泉為滿參上ス仍テ源卿物語與入ノ

事ヲ問ハシメ玉フ処定家自筆ノ奥入所持ノ由

然ルニ揚名今ノ処注釋ノ上却テ是ヲ銷スト云

云

十七日 禁中并公家中諸法度十七箇條ノ内

一條ニ天子諸藝能之事第一御學問也不學則不明古道而能致太平者未之有也貞觀政要明文也
寬平遺誠雖不窮經史可誦習群書治要云々和歌
自光孝天皇未絶雖為綺語我國習俗也不可棄置
云々所載禁秘抄御學專要候事

廿日中院ニ源氏物語初音卷ヲ讀シム

廿九日御教奇屋ニ於テ中院ヲシテ源氏物語篇
木ノ卷ヲ讀シメ給フ傳長老冷泉伺候ス障子ヲ

隔テ、女中衆同ク聽王ヲ今度大坂落人ノ中ニ
源氏ヲ讀ノ女アリ又能ク琴ヲ鼓ス云々

八月二日御數奇屋ニ於テ中院ヲシテ源氏物語篇
木卷ヲ讀シメ玉フ

五日 按ニ昨四日御出京 御船矢橋ヨリ水口着御

霖雨御轅ヲ留ル丁三日道春ヲシテ論語學而篇
ヲ讀セラレ能竭其力能殫其身云々口ヲ

御自身御讀ナサレ能ト云字義御講釋アリ 按ニ
カ丙辰紀行水口ノ条ニ去第八月四日 大相國
ニ總凡所記出所有之望日世不又為之

二月二日御夜誥御病間ニ羣臣治要校合人ハ五

信ヲ呼下スヘキ旨仰出サレ今上二月七日ノ昏中ニ云羣書治要校

以テ候云々中ニ御病ハ是歳正月廿一日

神君田中へ御遊獵ソレヨリ御不例ナリ此群臣

治要板行等ノ丁ハ御病中ノ御世誥ナリ尋常好

ノ典籍ニ御心ヲ尽サセ給ヒシ御事感

七日板倉伊賀守ヨリ羣臣治要板本彫手摺手本

切トモ廿人差越ス校合手ハ京都ニ無之由

廿三日三ノ丸御舞臺ノ芝居ニテ羣書治要板行

始ル 羣書治要板行ノ間諸法度五箇條ヲ定ム

本多上野ハ松平右衛門佐板倉内膳正秋元但馬

守總裁タリ同日羣臣治要板行ニ依テ銅字并ニ

小道具トモ西丸御小納戸ヨリ取出シ三ノ丸ニ和

渡ス

廿五日群臣治要不足ノ鑄字明人林五官ヲシテ

補造セシム以上共先記

廿九日相國御拜任ノ時御歌一首アリコノ時

台徳公モ亦御歌ヲ詠セラル駿河草

三月十日直江山城守へ律令并ニ群書治要ノ異才

夫搜訪セラル

十七日羣各治要植字ノ時見合ノ為メ一本新寫ノ事清見寺臨濟寺寶泰寺ノ僧へ命セラル以上光記

四月十七日 神君棄羣臣

五月下旬群書治要開版成光記

駿府御文庫十一本配分三家十一月道春ヲシテ駿府ニ至ラシメ御成庫ノ御全

籍ヲ分テ尾張紀伊水戸三家ニ賜ハル

駿府御文庫文収江戸御文庫八日日本之舊記ト希世ノ古本ハ江戸御文庫ニ

納メラル道春年譜又按ニ此事年譜ニ月日ヲ記

一入ル内蔵云馬殿日没ヤム田舎及帳目付
此中元和二年十一月八日御文庫へ納メシト明ナリ
ハ此歳十一月駿府ニ至リ御各物ヲ配分シ一屆
府ノ後同月八日御文庫へ納メシト明ナリ
以上

神君ノ御時ノ事ナリ

元和〇年

羣書治要天朝ニ献ス〇月〇日銅版羣各治要ヲ 天朝へ献セラル尾張本考

同七年

十日 後水尾帝ヨリ勅版宋朝類苑ヲ賜フ 御首

於テ金地院是ヲヨム前參河守定基入道寂照

入宋シテ采帝ニ崇敬セラレシヲ聞召テ日本

ノ名譽ト御感アリ 元和年錄〇詳ニ勅本考ニ出ス

寛永〇年

口月口日御居間ノ側ニ御學問所ヲ建テ御張付

ハ墨繪ノ耕作ノ圖ナリ 續明良洪範

寛永

同八年三月十九日尾張段ヨリ世界ノ圖進上セシ

凡 行 錄 臣 言

以上

台德公ノ御時ノ事ナリ

謹按ニ中井家譜ニ大和当正清於駿府
台德院殿中七歳ニ於テ常ニ遊ル中天神ノ名
號降ルハ於今布指ハト見ユ 公ノ幼早
成ヲ關ヘシ元和小説ニ小説動云諸物
承ル所ナリ三ノ時ナリ學問ニ成云所若
き時ナリハ儒學ニ成ルハ動云儒學ハ
間々ハハ儒學ニ成ルハ動云儒學ハ
名存儒學ニ成ルハ動云儒學ハ
リ又本作録ノ序 台廟或時天下の諸孔國
家之最要人君ナリ万民の若樂何あふ不
より記ニそと工夫ある事ありやと御尋の時
毎佐後ニ心算要七條を一冊子に録シテ奉

云へり、駿府記慶長十六年十月十一日、
日々被献珍物、以御使者令窺御機、
御孝行超越虞舜、漢文云々コレ
ヲ御覽スヘシ前ニ引ク常ニ經史ノ講談
ヲ聞召シ又詩ヲ御印籠ニ蒔繪ニナサレ東
鑑ハ訓點ヲ命セラル、御孝德ヨリ出シ御事ナル
ヲ遵奉セラレシ御孝德ヨリ出シ御事ナル
ヘシ今御文庫ニ公ノ御前本義之聖教序
墨本現存ス豈又傍ヲ入木ノ藝ヲモ好マセ
ラレシニヤ元和小説又云終ニ物語書ニ
以事見ふ、ハ條の沙小傳、
有、ハ言カ接津、
沙多、
ハ在、
ト見エタリ

寛永九年

四月道春ヲ召テ侍讀タラシメ論語ヲ講シ貞觀政

要ヲ讀シム道春年譜

五月金地院和漢通用集ヲ献ス光記

同三年

三月道春ハ命シ大學和字抄ヲ撰セシム羅山文集并年譜

五月道春ニ孫子諺解ヲ撰セシム上全

六月三界諺解ヲ撰セシム道春四書五經ノ要語ヲ

標シテ是ヲ献ス道春年譜

七月六日 天皇ニ條行幸 台徳公 大猷公和歌

ハセラル 寛永行幸記 起行與還年

ナリ御法今ヲ頒布セラル

二月除夕林道春同永喜ニ法印位ヲ賜フ蓋シ儒

臣ヲ崇尚セラルナリ道春年譜并ニ文集

同七年

二月廿二日武別水尾谷へ成ラセラル糸棚ノ御詠

歌アリ水尾谷村養竹院所傳并ニ羅山文集

是歲御即位アリ道春ニ命シテ上使ニ從行セシメ
ウル道春狩野守信ト和字ノ圖記ヲ作テ献上ス

道春年譜

此年ヨリ長崎ニ於テ舶來ノ各籍ノ内耶蘇教法ノ

各ヲ禁セラル是ヲ禁各ト云長崎舊記つ安歐

作三十二種ソノ他教法ノ各ヲ云ナリ

同九年

是歲冬尾張殿義直卿孔子堂ヲ惣岡ニ建ラル寛永年譜

冬ヨリ翌十年マテニ諸寺院ノ本末ヲ書上セ

諸宗末寺帳三十四冊現存ス

十年

十七日上野孔子堂へ御成道春ヲシテ竟典

ヲ講セシメラル是御當家大成殿御成ノ始十

リ此時道春ニ銀子永喜ニ時服ヲ賜フ

十二月日道春ニ命シテ大姫君御婚禮記ヲ作シ

ム按ニ御文庫ニ此記一冊現存ス道春編各日録

作之再按ニ大姫君ハ廿日初テ御各物奉行ヲ置カル御日記ニ十二月

右四輩所書物等ハ

同十一年

三月今年御上洛ニ付宮城越前守和甫東海道ヲ巡

視シ圖ヲ作テ御覽ニ備フ宮城家譜

六月御上洛ノ時治途ノ御詠歌廿九首アリ寛永

林道春ニ命シテ御入洛記ヲ作ラシム道春年譜

又東武実録ニモ道春ノ記ヲ載ス

十月林春齋八十七史ノ闕卷ヲ賜ハル御文庫

同十二年

正月道春ニ命セラレ和漢法制三卷ヲ撰上セシ

六月御法今十九條ヲ頒布セラル其第一條ニ文武
ヲ馬之道專可相嗜事ト輩セラレタリ

同十三年

正月仙洞へ律令ヲ貸シ進ラセラル御文庫
文帙

二月道春ニ命セラレ和漢荒政恤民法制二卷ヲ撰

セシム道春
年譜

四月日光 東照新廟改築造畢ル 御登山下リ道

春ニ命シテ新廟記ヲ作ラシム道春年譜按ニ今
御文庫ニ日光山

御記ニ
冊アリ

九月祭祀ノ印章ヲ諸國ノ社家僧徒ニ賜フ

十二月朝鮮信使来朝ス道春ニ命シテ筆語問答セ

シム且御返簡視草セシメラル是武家ノ代儒臣
ハ外國ノ通書ヲ草制セシメラレシ事、始ナリ

譜ニ云先是武將與朝鮮贈答書使禪僧作之既為
舊例今般初使道春為之按ニ玉音抄ニ道春朝鮮
人ト筆談仕候ニ只故事未歷ナトヲ相尋穿鑿仕
候段大猷院様御被成古ノ如クナルヲ筆語
セムヨリハ異國ニテハ如何ヤウノ仕置ニテ國
ヲ治メ候ヤ仁義忠信ナトノ義ハ如何ヤウ存候
ナト、アルヘキ事ヲコロソ尋候テ可然ト御意
被成候由又按ニ五岳僧ヲシテ朝鮮往來ノ事ヲ
司トラシメラレシ事ハ
詳ニ古文故事ニ載ス

是歲画師探幽ニ命セラレ 東照宮御縁起ノ圖ヲ

作ラシメラル 御按ニ舊峯ニ集画師探幽ノ碑銘ニ

此歲圖ヲ御日記ニ御縁起ハ十六年ニ文成リシナラムカ

同十四年

三月天海僧正ノ請ニ依テ東叡山ニテ大藏經新刊

ノ事ヲ命セラル 東照宮三十三回御忌記按ニ此

年ヲ歴テ成ル 詳ニ下ニ見ユ

七月堀田正盛ヲシテ道春へ經各ノ語ヲ論題トシ

儒士ノ問答ヲ聞召サルヘキノ御沙汰ア 道

同十六年 年譜

七月八日紅葉山御各物藏ヲ建ツル 寺重按ニ御日

記ニ七月八日 御書物藏ノ權輿ヲ檢出ス

ル所ノ見ユ是ヲ初テ御書物藏ノ權輿ヲ檢出ス

士見ノ亭へ御文庫ヲ御建立アリテヨリ以來此

ニ至テ三十八年初テ紅葉山御寶藏構ハ引移サ

レシナリ再按ニ當時御各物奉行西尾正信星合

具教家譜ニ共ニ云寛永十六年八月十一日 所

紀城災燒の時富士見の丸急かりしハ所文庫ニ

すト云々然レハ紅葉山御書物藏ハ七月八日ニ

取掛アリテ富士見御文庫危カリシヲナルハ 大災アリテ富士見御文庫危カリシヲナルハ

是月道春ヲシテ無極大極ノ字抄ヲ撰セシム
道春

年譜

九月八日。柳生但馬守兵法ノ書物ヲ獻ス
御日記

十四月三日
東照神君御縁起草篇成

四日 御縁起ヲ御三家方へ内見セシメラル

廿五日御縁起卒業

閏十一月三日光御縁起ヲ酒井讃岐守ヲシテ
伊亞相宅へ遣ハサレ彼亭へ尾張亞相水
黄門

黃明

参白
以上御日記○按二日光御縁起詞ハ
宸翰アリト云フ御縁起ノ末ニ云
家光公の
た毎ハ「秘」ハ新うマウテ威を海一人ハ佐な
以他ナリ从成ヨ東照太權現園位の傳を縁記
日本國ノ末代ヨ傳ヘ后館されを因て言重ク思
掲焉ありと云々

同十七年

四月 東照大神二十五回御忌 御登山アリ道春

二命シテ御藥會記ヲ作ラシム

道春年譜

同十八年

二月七日武家ノ系圖ヲ編纂セラルヘキ旨仰出

廿八 御日記云二月七日諸大名家の系圖を
記し可き事と云ふに因中より

中傳ふ事と云ふに因中より
太田家譜道春年譜ニ見ユ

二ノツテ我ニ寛永諸家系圖傳ト云是御當家

撰各ノ始ニシテ武家ノ代大部ノ書ヲ 鈞命御

定セラル、濫觴ナリ 按ニ 大猷公治世畧記ニ

猷之太田備中守奉行於評定所清春之真名假名
右西道真名者道春父子其外諸儒者及金地院良

長老五山長老案之假名者高野山見樹院立論并
御右達バ々草之至寛永廿年功成亦公家系圖門

跡院家列祖等各依仰連々調進之
吉良少將義弥奉之トアリ

六月武州王子縁起三軸道春ヲシテ其詞ヲ書セ

シメラル 縁起奥旨并
羅山文集

八月鎌倉將軍家譜ヲ道春ニ撰セシム 羅山文集并
年譜治世畧

記

九月本朝神代帝王系圖ヲ道春ニ撰セシム 全

十月京都將軍家譜ヲ道春ニ撰セシム 全

十一月朔日武家系圖編纂ニ依テ御書物奉行四人

へ掛リ仰有ラル 三雲平左衛門成賢系譜ニ寛永
十八年太田俊中が資宗を

諸家の系圖を撰をしをらるにあり十一月朔日
佛をうけて因幡西尾赤松の西條関兵衛二帝心

成を合符左の具敷あり
因しをり此後を勤む

十二月信長譜ヲ道春ニ撰セシム

同十九年

二月豐至秀吉譜ヲ道春ニ撰セシム 羅山文集

口月中朝帝王譜十三卷道春ニ撰セシム 羅山文集ニ跋語ヲ云欽奉台命所創

撰也自古蜀蜀魏吳則春恕纂之自晉以下至於皇朝皆守勝纂之云々數千萬載之盛衰帝王本枝之綿絳可三以乙覽而知也

三月十日金地院并正意ト幽了の大橋重政小島重俊及五

岳僧等ニ命テ武家系圖編集ノ事ニ預ラシム 系圖傳太田資宗序

同二十年

八月晦日御達歌 山名家所藏懷帝

九月十七日武家系譜成ル 御覽ニ備フ薄ハ百八十六、七和字

百八十六卷總計三百七十二卷寛永諸家系圖傳ト云 系圖傳序太田家譜ハ守重撰ニ今御文庫ニ假名本現存ス其真名ハ

八日光神庫ニ奉納セラレ其寫本コニアルナリ

廿一日諸家系圖傳ヲ總裁セシ太田備中守資宗へ

賞賜アリ 備前國一文字吉房ノカヲ賜フ○太田家譜

是歲東福門院ノ下問ニ依テ阿部豊後守忠秋朝

鮮主来ヲ称春齋ニ作ラシメテ京都ニ献ス 春齋譜畧

二十二年 東福門院有欲聞朝鮮來貢始末之旨上阿部忠秋使余作記而献之京者ト見ニ朝鮮往來七冊

御文庫ニアリ

正保元年

正月十日諸家系圖傳編纂、役人へ賞賜差アリ
御

十一月本朝縮手錄四冊本朝王代系圖大綱道春

命ヲ奉テ撰上ス

十二。日本國郡圖。同諸城繪圖。ラシメ

正保古國繪圖ト云今御文庫ニ
 存ス
 後守宮城越前守總裁タリ此事
 大猷公治世畧
 記ニ載ス此時ノ案文等ノ御觸ハ
 御當家令條
 二出
 タリ

同二年

二月廿六日御連歌
藏懷紙

三月老子諺解道春ヲシテ撰セシメラル
羅山文集

四月道卷二 命シテ
若君御元服記ヲ作シム
春道

年譜二 四月廿三日 幼君著 袴元服使下道春作中
倭字記上 三 一 御文庫 二 符 元服記 一 冊 現存 久

五月日光山久能山神庫二所藏スル東照大神御

官位ノ文各ヲ寫シシメラル尾張義直卿七亦勘
文ヲ献セラル道春年譜二年有旨考東照
道藏孫其事使春齋馳驛赴日光山赴久能山寫其
所藏之舊章與義直卿所献併技之首尾全備既考
台德院殿位記宜旨次茅トアリ春齋譜畧二五月
朔處日光逢毘沙門堂公海馬神庫所藏太政大臣
宣旨同九日登久能山馬御官位宜旨八通而歸到
大磯驛會勅使菊亭大納言經季自江戸歸洛告
其趣其後經季卿奏聞補不足而東照神君御官
位宜旨全備云々今冬松平伊豆守殊受密旨未
問宮與社之差別道春献勘文其後酒井讃岐守在
命未訖再々密旨道春與疾登城於便殿直被問
之云々及冬經季卿為勅使登日光山
有下改東照社賜宮號之宣旨云云
是歲小笠原右近將監忠直卿二家傳及ノ

式ヲ記シテ奉ル小笠原家譜云月
股ノ丁ニ依テ下問アリシナル四月
ヘケレハ四月ノ前ニアラムカ

同三年

四月十七日 權現様御年譜尾張亞相義直是ヲ撰
上セラル紅葉山 御成出御ノ刻御白昏院 御
著座御頂戴アリテ御年譜内御宮へ奉納スヘキ
ノ旨阿部對馬守へ被 仰付御日記二四月十七
藩尾張亞相累年云書記具此旨令今日要相
忌齋未始系御城阿部守良若按旨今川
刑部太輔後免之御白書院御席要提退書
一已上別紙奉山 御宮江御系臨 一尾張大綱

[illegible]

玄中大成集遠近智極集三部ヲ
台覽ニ備フ

抄ヲ獻シ其後士鑑用法ヲ撰上ス
北條系譜

同四竿

十月十一日北條正房 仰二儀ヲ城名等圖 献上

久
系北
圖條

十一月十三日王子村ニ於テ犬追物アリ林春齋大

追物御覽記ヲ献ス
 春竊記畧ニ
 記シテ應
 唯ハ有別記
 作ノ丁七進
 呈

ノ
一
冊
ア
リ
必
是
献
本
ナ
ラ
ム
故
ニ
爰
ニ
附
ス
御
覽

是年林道春ヲシテ日本大唐往来ヲ撰セシメラル

日本大唐正保一冊御文庫二現存ス按二道春編
書目録二正保年中大明福州鄭芝龍與韃虜戰而
獻_レ春請援兵於本朝時應_レ教而獻之_トアリ再按
二春齋譜畧二四年福州有_レ乙援兵之事上書簡屢至
或讀_二進御前或日二陪閣者席此事皆執政甚秘
故余亦不能寫之共畧記粗存於家_ト三工夕リ_林

家ニ存ル処夏夷變態崎嶇小説若干冊アリ此
時風説昏ナリ邇來御文庫ニ收儲セラレ

慶安元年

四月 東照宮三十三回御忌 御登山アリ道春ヲ

シテ圖記ヲ作ラシム 道春年譜ニ道春奉從之應
教作記ト三工春齋譜畧ニ

作記詳叙始末憑讀收歟之又圖其大要每段作
其辭ト見エタリ御文庫ニ御記一冊現存ス

同時日光御宮ニ於テ新刊ノ大藏經 御覽アリ

是往歲天海僧正へ命セラレシ本ナリ 林春齋カ
三十三回

御忌記ニ慶安元年四月十七日ノ條ニ將軍家御
座起セ給フ時若狹小將進出テ新刊ノ大藏經成就
スルヲ言ハス是ハ慈眼大師存生ノ時ト謂フ
リテ東屋上ニテ新ニ開版ノヲ行ハル

部板行終ルニハ今度當山へ持セリ今日
テ拜殿ノ西ノ方ニ五百餘通積カスヘ置
台算ニ備フ東朝ニテ藏經ヲ梓ニ刻ムトハ
ソ始ナルヘシヨク按ニ此時新刊ノ藏經目録
ニ部數一十四部五十卷數六千三百二十
三卷函數六百六十五寬永十四丁丑三月
刊行ノ到慶安元戊子三月十七日
經歷十二年而終其功焉トアリ

十二月十一日武藏上総ノ國繪畵 仰付ラル 慶安
記 御日

同三年

是歲北條正房陣屋割等ノ圖并阿蘭陀國攻城ノ法

ヲ記シ其器城ヲ制ニテ獻フ 北條系圖ニ三年
幕下及所迫者ノ人數

後リ並改居列中律中教。國諸士各糧主用おけ
るを授室一給當及冊子とあして名覽は海
を後阿蒙院人來。時作り或は未を以て其形を
造るを指問し是な書に作り或は未を以て其形を

以上

大猷公ノ御時ノ事ナリ

守重云人主ノ學問ハ經術ヲ本トシテ歴史
ヲ通考シ古今ノ家國ノ安危存亡成敗治乱ノ
機ヲ察スルニ在リ竊ニ惟ミルニ成敗治乱ノ
マセキレ、英明ノ天資ヲハス以テ能ク學術ヲ好
語貞觀政要ヲ讀シ恥給ハス即位ノ初ニ畧孫
子及能當テ御講論アリ荒政不民ノ後
ミナ能當テ御講論アリ荒政不民ノ後

論題上ニテ問答ヲ設ラルル
歴代帝王ノ事業ヲ研究セリ右大將家ハ永代カ
邦ニ替ヘテ歴代帝王ノ事業ヲ研究セリ右大將家ハ永代カ
ラシ給フト和漢古今ノ學問ノ方ハ是ノ史ナリ
曉シ執事ヨリ云ハシ臣ニ至ルマテハ是ノ史ナリ
ヲ將順セリト謂フヘシ異代好學ノ主ト云
トモ豈敢テ企テ及ヘシニ異代好學ノ主ト云
如キハ世ニ十餘人及ヘシニ異代好學ノ主ト云
ニ於ルハ大成殿ニ臨テ亮典ヲ講セシメテ
レ國繪圖諸家系圖傳編年錄ノ講セシメテ
キハ武家ノ代亘古未嘗有ラノ盛事也宜ナ
ル哉神祖ノ文神武ノ美徳ヲ續述セラレ
フ御事欽スハシ大統ヲ岳給



